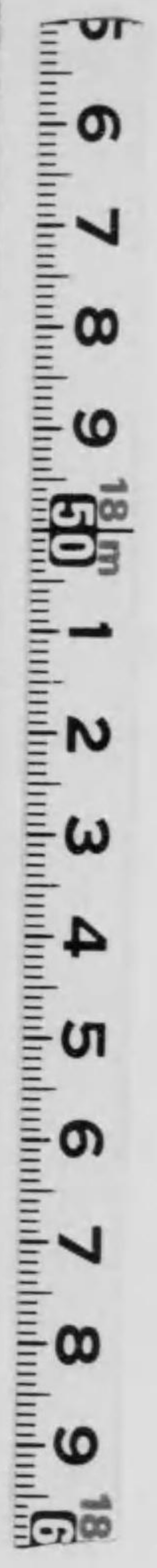




いさぎのり

11  
495

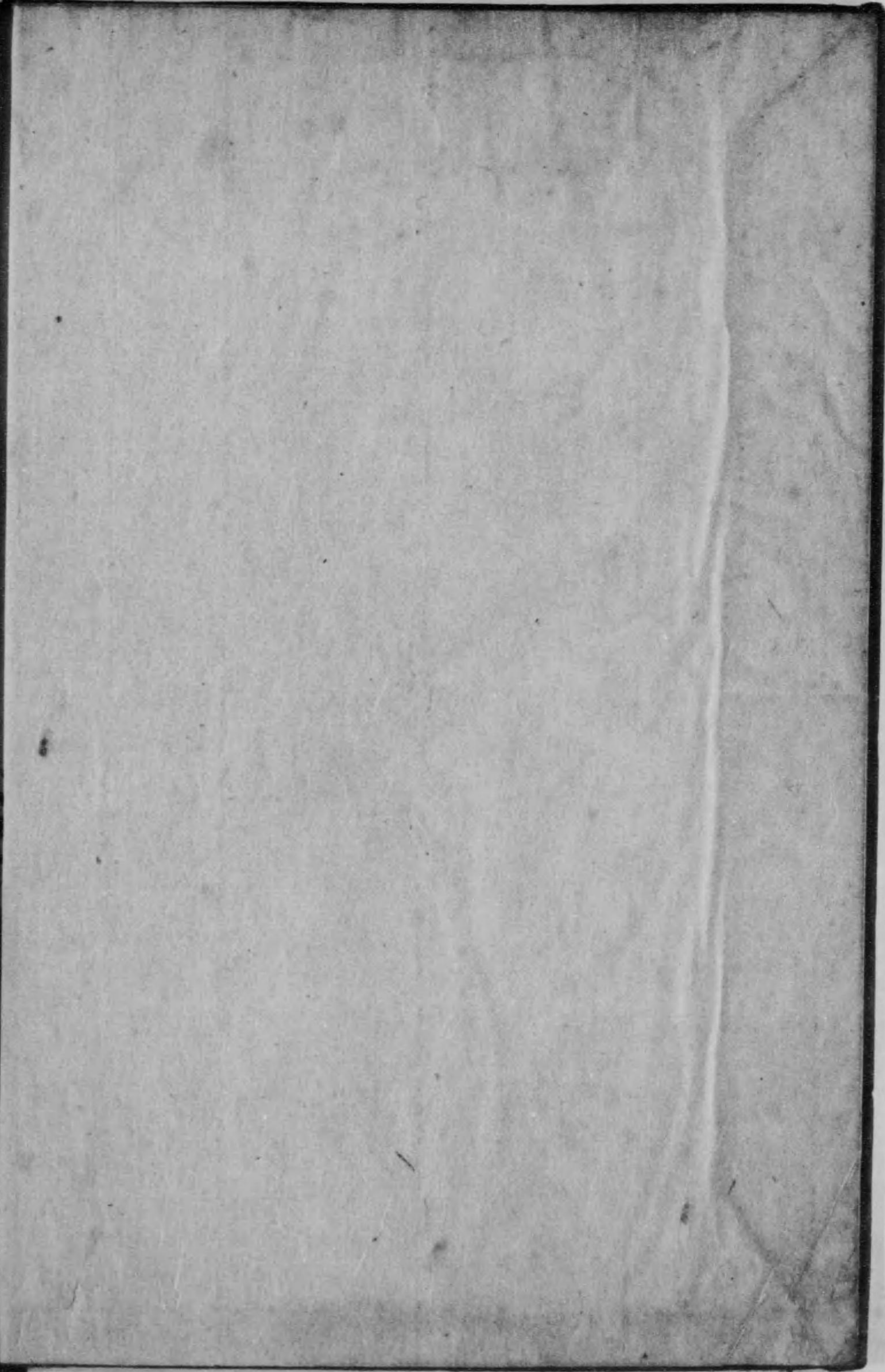


始





Handwritten text in Arabic script, oriented vertically.





11-495



吾背の君、世にいましつるほど、折にふれ事につきて、摘み出でまし  
 し言の葉ぐさの數、いとさはなりき。されど、いつもやがて筆とり  
 て、紙に、絹に、短冊に書いつけ、ひとにおくりなどして、書きとめおく  
 ことをし給はざりき。こたび一めぐりの近づくまゝに、悲しびさ  
 らに新たなるにつけて、かりそめの筆のすさびも、ちりぼひはふら  
 かさむが惜しさに、あるは思ひ出で、あるは人々に問ひ、あるはたま  
 たまのこれる下がきをあさり出でなどして、かくは一卷に物し侍  
 りて、親しき人々に分ちまらするになむ。もとよりいとみに  
 撰びつるなれば、こゝに掲げたるは、十が一つにもみたるべし。  
 この書を見まさむ人、洩れたるに心づき給はば、いかで告げおこせ  
 給へかし。

詩の草稿は、大方のこりをれば、こは佐藤六石ぬしを煩らはし侍り

大正  
 10 10. 6  
 内交



て、いとあつき書と成りつ。三年の折まで、いかで世に公けにせ  
まほしく思ひ居侍り。

附録にかかげつるは、大磯滄浪閣にて、父の還暦のうたげのをりに  
ものせられし餘興の小喜劇にて、中なるゆかりの色といへる歌は、  
博邦ぬし謠として獨吟し、おのれ長唄としてうたひつるものなれ  
ば、思ひ出ぐさの一つとして添へつるになむ。

はかなくもかへらぬ水のうきくさの

あともしばしは世にのこれとぞ

大正十年九月十日あまりの夜城山の松かげにしげき蟲の  
音を聞きつゝ、

末松生子しるす

### うきくさのあと目次

#### 和歌

- をりくさの歌……………一
- 蓬萊園諸勝の歌……………二
- 野路の小草より……………三
- 青葉の車より……………一〇
- 下枝の紅葉より……………二五

#### 今様

- 清水がしら……………二九
- 恵林の鐘……………二九

#### 譯詩

- 新年の歌……………三一



俳狂歌句  
曲歌句

附録

雪……………	四四
御代の友垣……………	四五
こまのかしら……………	四六
ちとせの松……………	四七
千代のよはひ……………	四七
太平洋上祝賀會にて……………	四八
御芽出 三幅對……………	五三

うさくさのあと

末松謙澄遺詠

をりくの歌



輕井澤の別墅なる楓の鉢植を 明治天皇陛下にさしげま  
つりし折小さきたにさくにしるしてそへ侍りし歌  
いにしへの野芹さしげし述おひて今日たてまつる紅葉ひともと  
日本畫會に行啓の日細谷整珉作の小さき龜に添へてたて  
まつれる

さしやけき龜におほせてきはみなき君のみさかえ祈るけおかな  
明治天皇の大御病の御平癒を祈り奉りて  
天地も動かざらめやくにたみの身をなげうちていのるまことに  
昭憲皇太后の殯宮に祇候のをりくによめる



青山の御そののりほとぎすころありげになくゆふべかな  
静けきが上にもいと静けきはみひつぎまもる夜半にぞありける  
君と國にさしげましつる御こゝろをかよみにせばやひろき此世の  
さらに又まごころつくしつかへまさむさき立まし大君のもとに  
みあかしも消え入るばかりほのくらきさよふけがたに不如歸なく  
けふとくれあすとあくれとありし日の玉の御聲はきくよしぞなき  
なとてかく世のまがごとのつらくらむ天ぎる雲もまだ晴れなく  
身をさきに示しましたるをしへぐさ忍びまつるもかしてかりけり  
目をとちてうちをろがめばありくと浮びぞいづる玉のみすがた  
かしくもまなびのそのに残しました玉の御うたの光をぞおもふ  
ゆめの間に日數過ぎつゝ代々木野のいでましの夜もはや近づきぬ  
かへりまさぬたび路の空にいでましの夕べ思へばなみだぐましも  
大御目にふれつと思へばあなかしこつたなきおのが筆のしづくも  
御めぐみの露のひかりは消えざらむ賜ひしきぬのいろはあすとも

二

蜂須賀侯の一年祭の折に

とこしへにゑみやますらむ塵の世のうき事しらぬ玉のうてなに  
己未元旦

いざくまんとその豊御酒天地もつはものあらひよき春はきぬ

己未一月人々の東八景を唄ひはやして新年を祝ひける日

いと竹にうたのしらべに大御代をほやあづまの八の名どころ

戊午の新年大磯の母君に

こゆるぎの磯邊の松も今朝はしも日さるにまさる色やみゆらむ

雪の日鎌倉なるなりどころに人々來りける日

新としをことほぎがてら雪見んとみやてはなれてきつる君かも

おもふとちうちかたらひてすさしけり鎌倉山の雪のゆふべを

實朝公七百年祭に

あれはてしなく百年のおくつきを雪ふみわけてとふ人もあり

臘梅一株を久我侯におくりける折

三



まゐらすこの梅が枝に此頃のうさはらしませ春を待ちつゝ

高橋帯庵ぬしのもとにて

思ふとちまとぬしをれば梅雨のふりしきる夜も樂しかりけり

日高龜市翁の年賀に

わたつみを田畑となして國のためたてし功はかきりしられず

島村久君の母刀自信子ぬしの喜壽の賀に

喜みがめづる岡山松の十かへりの榮えや君がよはひなるらむ

大瀧金江刀自の七十の賀に

撫子のさかゆく見つゝ君はしもなほいくそちの春をむかへむ

高橋八代松ぬし妹背の高齡を壽ぎて

八代松のよはひはいよゝ千代かけていや高砂と榮えゆくらむ

田崎氏新婚のために

朝な夕な身をすくよかに守りつゝこゝろをつくせ神と國とに

某の新婚賀に

とことにはたえじとぞ思ふ玉ちはふ神むすびます今日のえにしは

玉置翁七十の賀に寄玉祝を

こゝろこそ人の玉なれうれしきは君がこゝろの玉にぞありける

佐々木弘綱翁の十年祭に翁がよまれつる鶉鴉の歌を思ひて

みな人のこころに今日やひやくらむゆきにし君がうたひにし歌

同じ折硯を信綱大人におくるとて

しきしまの道はたふとしこの中ゆあまつ雲霧きみおこさなむ

佐々木弘綱翁の三十年の記念のまゝに懐舊といふことを

たゞすめば園の那木の葉ふく風もゆかしさ誘ふ今日にぞありける

高橋氏におくる

いまだなほ夢うつゝにもうかぶらんむかし手なれのわか駒のかけ

はじめ大竹虎雄の家をとひける折鶯の啼きければ

たづね來しけふをよき日とほぎてにや庭の小枝にきなくうぐひす

宮島にて



あさまだきねさめの窓にうぐひすのきなくも嬉し宮島のやと  
平塚にありける頃折にふれて

高麗山のむら松をしらすな磯馴松かげゆくほどの心しづけさ  
うつせみの世をしらすな磯馴松かげゆくほどの心しづけさ  
相摸がたうらわく月に月さえて雁なきわたる伊豆のしまやま  
見る限りむら立つ松のあなたより一穂二穂とたつけぶりかな  
春はなほあさきみぎはに月おちてみづよりしらむ花みづの橋  
枕橋なる某樓にて

白魚の瀬のぼるころや近からしぬるみそめたり隅田の川みづ  
こと問ひし其面影はありやなしやかなし汀のとり問はゞや  
わたし守ころしてさせ水馴さを陸にも波のたちさわぐ世を  
小梅村なる小宮氏を訪ふ水鶏の名所なりと聞く  
思ふかな書よむ窓のさ夜ふけて水鶏きくらむころはいかにと  
寺島村なる某の別墅に古書畫を見て歸るさ

歸るさはおぼろ月夜になりにけり小梅のさとに一日くらしつて  
滄浪閣にて

こよろぎの磯べのいほに今日はしも一日くらしつ昔がたりに  
大磯にてある人に  
めづらしくむかしの色にかへりけりあさ日にうつる濱の老菊

赤十字社病院にありける折友人の訪ひ来て梅雪などの事と  
も語りけるに枕邊の瓶にさせる梅の花の匂へるにたまくと  
雪のふり來にければ詠める

語りつゝまとぬに時をうつしませ梅も匂へりゆきもふりきぬ  
朝晴雪

大八洲やしまの外もうらくとはつ日にほひて雪はれにけり  
田家早梅

春風のめぐみまだきに見ゆるかなふせ屋の軒に梅はしらみて  
春朝



鶯にゆめさまされてたぐる戸をおそしとやうつ花の一ひら  
花かげにかたると見つる夢さめて名こりゆかしき朝心地哉

春山

きのふ今日高嶺を春や越えぬらむ霞みそめたり四方の山々  
うすがすみそこはかとなく立つ中に青み初たり遠山のまゆ

春野

消えて行く去年の名残をあとにして焼野の雨に萌ゆる若草

春海

百千鳥さへづるころは花咲かぬ大うなばらもゆたけさましぬ  
八汐路の潮路にはるゝ島根より雁もろともにたつかすみかな

春鳥

花さまくかすみうらく時つ風のどかに吹きて百千鳥なく

春旅

花見つゝむかしめぐりし大和路を夢にわけ行く朝ぼらけかな

歌のまとゐに花といふことを

いつ見てもいとほきものは敷島の道のしるべの花にざりける

同じく牡丹といふことを

つちかひし日頃の種の花となりてつとふ人さへ色ふかみぐさ

花傷心

けふはまた花もかすみてみゆるかなかへらぬ人の昔おもへば

春懐舊

ゆめのまに早二十とせの春すぎぬちれる櫻をおもかげにして  
軒端なるゆかりの花のゆかりにもゆきにし人の忍ばれにける

園

あさなゆふなそゝろあるきに世の外の趣き添ふる山かげの園

寄花祝

八十年の花をみてこし君はしもなほかぎりなき春やちぎらむ  
なにがしの賀に



いつみてもおかみどりなる松のいろのさかえや君が齢なるらむ  
千代かけてながれつきせぬたきつせや君が齢のしるしなるらむ

生子と婚約しける折に

わがやどの池のみぎはにうつさばやまつにかゝれる藤波のはな

己未元旦生子に示したる

みそとせをなれこしやとの友しらがまた一すぢをそふる今日かな

明治三十七八年外國にありける時生子より書のうちに萩の

おし花をおこせける時我庭をめのまへに見るこゝちして

かれながらなほ露おくむこちして見なれし庭の秋し忍ばる

同じ頃佐々木大人より心の花をよせられければ

はるくくとわがまごころの花をとてよせつる君がおもかげのみゆ

英國にて折にふれて

筆とるもくるしきそらを野も山も火花とびかお方をしぞおもふ

けおも又たびねの夢に見つるかなますらたけをが血いくさのさま

蓬萊園諸勝の歌

松浦伯爵の蓬萊園の諸勝の吟詠をとありけるに

岩間の迫門

みちしほの入江のまごころさくとなり岩間のせとに水やますらむ

細江の橋

むらさきのゆかりの文もめに見えて細江にうつるおぼろ夜の月

影ふむ橋

月見つゝわれとわがかげふむ橋をすゞしく渡る夏のさよかせ

見わたしのつかさ

みわたしのつかさは世々にかはらじな花に紅葉に雪に青葉に

さし出の崎

そなれ松うつれるかげのゆかしきを月もかすかにさし出の崎

小町のやしろ



さきて散る花のすがたを人の世のかゝみにとめてゆきし君はも  
うきくさのはし

そのかみのわびにしあとぞ忍ばるゝよもうき草のはしと思へば

壺 墳

ひさし野のむかしの月ぞおもはるゝみちの枝折を庭にながめて

雨兒島三見岩

ふたごじまゑみつゝならぶみつ子岩遊ぶかもめを友垣にして

かゝみのわた

すみわたる水のかゝみは朝な夕なながひる人の心をやうつす

夕ばえの小岫

夕ばえもてりこそまさめあきらけき御代の光のくましなければ

的にはの原

弓矢とりしそのおもかげの今もみえてまとはの原に櫻花咲く

うまば殿

のりならずこまのあがきもいさむなり若葉すゝしき森の朝風

にほふ畝尾

あけゆくを知らでや月もあてがれむうねをは花を白雲にして

葉わけの徑

吳竹の葉わけのこみち風ふけばあつさも知らずみとりしたゝる

たが袖がき

われもまたそこはかとなくだとるかなたが袖垣に花のにほへる

静御前の石燈籠

くりかへししづのをだまきうたひにしこゝろや今も石にのれる

三千世の洞

桃の花にほふもゆかし三千とせの其いにしへを見るこゝちして

野路の小草より



輕井澤を過ぎける折汽車中より清水頭なる我別莊を見かへりつゝ

輕井澤しみづがしらの庭木立みえずなるまでわれはながめつ

布引山の下を汽車にてすぎける折寺の住職覺順師が過ぎし頃語り合ひつることものなりゆきを語らんとて小諸より大矢まで同車したりけるに

はしりつゝ見るもなつかし夜一夜をかたりあかし、布引の山

挿霧新道にて

挿霧新道は苧嶺川の右岸にそひて崖の中腹に開ける新道なり二里ばかりがほど絶壁兩岸にそびえその中を繪にかける蜀の機道のさまに道をつけたるにて風景甚だよし人と駒をならべてそをすぎける折よみける

ゆけど、つきぬ岩間の谷川の水のながれのおもしろきかな

會の掛茶屋にて

挿霧新道の盡くる處にて苧嶺川は犀川に合す此處を三清路といひ岸高く水深く岩石層々のさまいとおもしろくて信州赤壁の稱あり其ほとりに會といふ處ありそこにやすらひけるに川には舟も見え此頃の月のさやけさ思ひつゝけられてよみける

くりかへし今宵の月をおもひく、たちさりかねつ會の掛茶屋

清音の瀧のほとりにて

ゆきく、つつかれし駒をしばしとてとむる木かげにひやく瀧つせ

木崎の湖水に舟をうかべやがて向なる濱邊に上り森蔭の

白砂に席をしき網の魚を調理などして酒くみかはしける

折

白砂のはまべすゝしき森木立わがくむさけにかけゆるぐなり

こゝの森は古城址にて人々軍のことなど語りければ

杯をとりてぞかたる戈とりていきつ死につのをのこらのあと



東京にやりつる文の末に

一六

武藏野は今はいかに信濃路はよなく月の影ぞさやけき  
道すがら有明山にのこれる月を見つゝ

見るまゝに心もすみぬ信濃路の有あけ山にのこるつきかけ

渡波離橋は程遠からねと得ゆかざりければ

白駒の橋ともいふ元は白駒城となへし山城の正門の橋  
にて餓鬼澤となふる谷に臨み高く山巔に架す廢城年久  
しくして近村の畑道に用ふるのみなるも地方の一勝にか  
ぞへられて維新前は二十一年毎に領主より架換したりと  
いふ

時しあらばとはんともひしとはり橋すぎがてにすぐる我な恨みそ

桔梗が原にて

矢さけびのひゞきはたえて秋高ききちかうがはらに野菊はなさく  
諏訪にて

幾千たび人の心をとどめけんあかぬ眺の諏訪のみづらみ

白須の松原にて地方の人々の我が爲めに催せる茸狩にお  
もむきける折こゝは御料の地にてかしこきあたりの御使  
も屢々なりときゝければ

大君のめぐみの影はこゝにありとわれにしらすの松の下露

惠林寺に詣でける途中差出の磯にて案内の者こゝなん差  
出の磯なる花の頃はまた一しほのといひければ

今見ても花のさかりぞおもはるゝ笛吹川のさしいでの磯

惠林寺にて鼓琴の二泉をきいて  
山水のならず鼓と琴の音はいとど静けきものにざりける

水晶溪にて

御嶽に詣づとて人々と馬にて水晶谷を上りけるに數里の  
間岩石峩々たる斷崖の間に清き谷川流れて風景得も云は  
れず實に得がたき仙境なり

一七



人と岩と山と雲とのたゞすまひこれやまことの仙人の郷 一八

同じ折仙娥の瀑にて

おちたぎつ瀧にこそれり神世より神さび來つる山のこゝろは

又瀧のほとりにて小石など拾ひつる折

瀧津瀬をわけてぞ拾ふさゞれ石あさる心を家づとにして

大泉寺におもむきけるをり夢見山を見富士見の池を望

みて

夢見山ありしむかしのあととへば富士見の池も名のみなりけり

劍法館に招かれし時おのれも一試合こゝろみけるあと

にて戯れに

あげまきの昔かざし竹しなひかさせとわれは老いにけるかな

猷澤より舟出せる折

猷澤くだす小舟に影とめて名殘やをしむ甲斐が峰の月

船中にて

身延山しぐれやすらむ川舟の下るまにく寒くなりゆく

舟をとめて身延山に詣でけるに正面に三百級に近き石段

ありて毎級の高さも一尺にちかしこれを無難に上れる老

若は浄土往生疑なしと云傳ふそを攀ぢ上れるに雨も降り

來にければ

雨をつきてたどる身延の石だたみ佛やゑめる鬼やそねめる

又船中にて

駿河路ゆ吹きくる風に雨そひて霧にきえゆく富士の柴ふね

興津にて

富士の峰をうつす入江のたゞ中に一すぢ青し三保の松ばら

われをむかへて姨捨の月を見し人々におくるとて

月見つゝいつしかいねし姨すての山の一夜は忘れかねつも



青葉の雫より

屋島の談古嶺より壇浦を見下しけるに壽永の行在那須與  
一の扇射佐藤嗣信の戦死の處など盛衰記のあととも残る  
隈なく指願の中に在りければよめる(談古嶺とは村雲女王  
の命に給へる所なりとぞ)

古をかたるが峰の夕づく日見ゆるかぎりは涙なりけり

高松にて人々に程よく言ひなして夜いたくふけぬる頃旅  
館をぬけ出で唯ひとり車をかりて道のほど四里ばかりあ  
る志度浦に赴きける途上にて

かき曇りあやめもわかぬ道の邊を心ありげにてらす螢か

次の日とく起きて雨のふれるに志度寺に詣で玉取海士の  
墓と稱ふるをも見つるがその折

玉とりて玉の緒たちし玉藻よし讃岐の海士の故事あはれ

嗣信の墓のほとりにて

皆人に君が心をもたせばや己がじしなる事おほき世は

那須與一が祈岩といふを見ける折佐野令伯の故事とも思  
出て

琵琶になくもうべなりけりな其折の君が心をいかにと思へば

金刀比羅にて高杉晋作が潜伏のあとを訪ひける折

幾そたび生つ死つの峰こえてとよめつる名ぞをしかりける

嚴島にやどりける日時刻はおくれぬれと彌山にのぼりけ  
るに絶頂に至りし頃は全く暮れぬ佛堂などは寺守が持  
てるあかりにてあらましを見けるが目もあてられぬ様に  
て如來の御像など傍につくれる假小屋に安置して雨露を  
凌ぎまゐらせありその様を見て

名にしおふ嚴島根も荒れに荒れて佛ばかりぞ雨やとりせる

防州徳地の山間に赴ける折こゝは往時山縣大將など奇兵



隊の人々が防長の弔合戦すとてたてこもりし處なれば  
國のため死なん生きんと誓ひてしますら武夫の籠り處これ

同じ折堀といふ處にて夜に入り佐波川にそひて下りける  
に螢のおほく見えければ

今宵また心ありげに照しつゝ佐波の川邊にとふほたるかな  
故里にかへり雨を冒して父母の御墓を拜しける折

年毎にいやますものはたらちねのなき迹しのふ思なりけり  
先師佛山の墓のほとりにて

雪にたち庭をよぎりし迹さへもほのかに見ゆる奥つきのもと  
長州吉田の清水山にて高杉晋作が墓を弔ひ東行庵に憩ひ

生けるが如き晋作の肖像など見ける折梅處尼が何ぞ書き  
てと切に需めけるからに死猶生とかきたるあとにて

清水山峰の松風ふくかぎり死なじとぞおもふ君がみたまは  
石州濱田にて其處の鏡山は鏡山故郷の錦のゆかりの地に

て尾上お初の墓もありと聞きければよめる（或人と東にて聞けり來  
初女のは見に出さざりしと尾上の墳墓と認むべき出來事は發見せし藩  
髮にての纏めしなれば歟）

故郷に錦あやなす鏡山くもりなき名を代々に留めて

同じ處にて掬翠亭といふに人々の催せる懇親會にのぞみ  
其かへるさ

かくまでもさやけきものか五月雨の晴れにし夜半の天空の月

雨中高角山の柿本神社に詣でける折石見のや高角山の杜  
鶉この五月雨にぬれつゝぞ啼くといへる古歌を思ひ出て

杜鵑汝やはひとりぬれてなく高角山のけふの五月雨  
戸田の柿本神社に詣で人磨の墓を弔ひし折

ふる雨を苔むす石の手向にてたゞすみ居れば杜鵑なく  
同じ折案内の者の打歌山はああたりと指せる中に雨や  
みて雲の絶間より唯浮ぶが如くにあらはれ出ぬればよめ



る(古歌にはウツタと云ふ訓めはしど土地の人はウツタと云ふ習はしど)

五月雨のしばしとだえし雲間よりゆらゝに浮ぶ打歌の山

雨ふれる日津和野にて和泉式部の古迹といへる高田山の

ほとりに至りける折なけやなけ高田の山の杜鵑この五月

雨に聲な惜しみそといへる古歌を思ひ出て

ふりしきる雨を昔の形見とてなくか高田の山ほとゝぎす

石長の國境なる野阪の峠にて

石見のや野阪の峠タテにふりかへりわがふる袖を誰か見つらむ

途中にて田毎に早秧させる様を見ける折佐々木大人の送

歌をおもひ出て能因法師を真似るとにはあらねど實情の

儘を

田毎タテく早苗さす日となりにけり若葉とともに都出でしを

六月二十三日といふに歸京の汽車中にて朝とく目をさま

し首を擧げぬるにはや沼津わたりにて富士の山の殊にう

るはしく目に入りければ

たまさかに富士の笑顔を見つるかな身も大空にとぶ心地して

### 下枝の紅葉より

箱根の山は夢の中に過ぬれば

夢ながら箱根の山は過ぎにけりいづくの關に鶏のなくらむ

徳島にて一夜人々の催せる宴會の席よりひそかにぬけ出

でつゝひとりと車をかり道の程三里ばかりある小松島に遊

び辨天松原を徘徊し辨天山に上り夜いたくふけて旅宿に

歸りけるが其夜月いと清かりければ

あこがれてゆきつ戻りつ見れどあかす霜の月夜の小松しま山

鳴門に遊びけるをり予等の爲に有志が織しける汽船のう

ちにて戯に某氏に



白雲のかゝれる松の姿には君が心もゆらぐべらなり  
 月夜徳島より船出して大阪にかへりける海上にて  
 由良の海原なぎて天地もすきとほるごとさゆる月かげ  
 三田より有馬に赴ける途中  
 肌さむみたとる枯野の夕闇を破りて出る山の端の月  
 有馬にて

来て見つる甲斐もありけり有馬山紅葉に秋は色に出でつゝ  
 同じ處にて瑞寶寺の古迹なる日暮の庭といへるは土居通  
 夫氏の私有なるも門をとざさで諸人の遊覽をゆるせりこ  
 こに遊びける折心なき遊客の枝折る者多しとて庭守のか  
 こつを聞て  
 谷の戸を閉さぬ人の心しらで枝折る人の人ごころなさ  
 丹後にもものする途上榎の木多かれと榎紅葉ははやかくれ  
 ぬるにある山畑にうつくしく残れる一枝の目につきて我

生れし故郷の榎紅葉の思ひ出られければ  
 我ならで誰かはめづる山畑の榎の下枝にのこるもみぢ葉  
 由良の濱より海岸にそひ奈具あたりを過ぎて宮津に向ふ  
 に由良の海の浦わくの景色得も云はれねばよめる  
 類なきながめにもあるか小車のまにくめぐる奈具の浦わ路  
 天の橋立にて  
 幾年か夢路に影をうかべ来て今日ぞふみ見る天の橋立  
 宮津の荒木の別荘にやどりけるに家の主の記念に一首を  
 とありければよみける（遠く松と松は橋立の名なり林繁疎に松よりての松なり）  
 橋立の濱のあつ松うす松の翠うき來る水そひの宿  
 宮津より舞鶴にわたる船中にて  
 與謝の海せとわたりゆけば水の江の浦島が子のむかしおもほゆ  
 田邊の城はあれはてゝ古今傳授の松ははや代をかふるこ  
 と三回にして今のは形ばかりの稚木なりければ



敷島の道のしるべの迹とへば名残ばかりの松風ぞふく

二八

河守の元伊勢神宮に詣でける折社頭の紅葉を見て

我もまた神のまにくとばかりにはんとぞするこれのもみぢ葉

岡本某が過し世の宸翰をよみまゐらせては涙の外なき事  
とも多かるよしを語りける折

水莖の迹にもそゝや涙こそすめら御民のまことなるらし

愛知にて八事の八勝館に遊びける折家守の何ぞかきと

請ひけるに日は西天に傾きて今しも歸路につかんとしけ

る折柄なりければ(圖中に音聞山の古  
迹と刻せる碑あり)

音聞の山に一日をくらしはわきてぞをしきはやき日脚の

## 今様

### 清水がしら

輕井澤を過ぎける折汽車中より清水頭なる我別荘をみか  
へりて

千曲の月にいそがれて、清水がしらの柴の戸を、みかへりがちに過ぎゆ  
けば、淺間の山に立つけぶり、風のまにくとうちなびき、われに別を惜し  
むらし。

### 惠林の鐘

機山の墓のほとりにて

ひるも小暗き杉木立、岩根にむせぶてけ清水、こゝをとて世の床にして、  
ふしつる君がありし世を、おもひつゝけてたゝすめば、惠林の鐘に空く

二九



れて、またも身にしむ富士おろし。

譯 詩

新年の歌

米國大使館附外交官補騎兵中尉バルネット夫人  
フランシス・ホーグス・カメロン・バルネット獻詠  
從二位 子爵 末松謙澄奉命譯

ふる年は  
けふをかざりと過ぎさりぬ  
にほふ朝日にひととせを  
はじめし天の小車は  
ひと日くくとめぐりゆき  
あかぬなごりの今日の日の  
夕ぐれの日は照りはえて



空の關の戸黄金なし  
千代のみどりの老松の  
森のうしろにうすらぎて  
しづけき江戸の入海を  
うばら色なるにしきとし  
み雪いたゞくをちかたの  
富士のかなたに白かねの  
ほむらとなりてくれはてぬ

ほのしろき  
たそがれ時のおもかげは  
みるく西にきえ入りて  
おもはゆげなるうつくしさ  
ましろにたかくさしのぼる

月とともに晴れまさり  
けはひさやかにけり  
ねぐらをしたふよるのつる  
沈黙しんもくの空をよこぎりて  
なく聲清くきこえつゝ  
はりしつばさのそのかげは  
ゆめまぼろしのごとくにも  
雲井はるかに過ぎゆきぬ  
かくてその日は果てにけり

ひんがしゆ  
西ゆ南ゆまた北ゆ  
ひゞきはきこゆいく代々の  
たへなるうたのかすくの



つもりくゝて一時に  
わきたつ如くなりひゞき  
高くけだかき處より  
まろぶがごとく落ち来つゝ  
ふかくやさしくひろさりぬ  
これぞ今しもあら玉の  
年のはじめを知らせんと  
御寺くゝの高どのゆ  
おとそかにはたいさぎよく  
うちいだしぬるかねの樂  
ふる年は  
かくてぞ去りしいとほしき  
かつぎのきぬの時をへて

身をさるごとく去りゆきて  
あらたまりぬる年は來ぬ  
みかどと國とはた家を  
とはにかはらすおもふなる  
わがまごころの其うへに  
たとへば新衣まとおごと  
新としの衣まとはまし  
其新としはとこしへに  
松は千年をちぎりつゝ  
鶴は御空にかけりつゝ  
月はむかしのかげにすみ  
梅はむかしの香にかをり  
日々にあらたにのぼる日の  
いさましくはたのとけからまし



俳句

野路の小草より

前橋の臨江閣にて茶毘止水二子が歌仙を試んとて其發句を己に求めけるをり閣の奥庭には茶室の前にそこゝと萩の群立てる中を清き小川の流るゝさまいとおもしるきに閣の前面は利根の流に臨みて風清月白のけふ此頃の夜景は嗚かしの思はれければ

心地よや數寄屋の庭に萩と水

風清し今宵の月の思はるゝ

姨捨の長樂寺にて人々と月の山はなれをみし折

ちらり出た影に聲あり月見寺

姨捨やむかしもいまも月は月

田毎の月は名のみなりけるも山の端の月の千曲の河波にうつれるさまの得もいはれねば  
この月や田毎ものかは千曲川

月見堂聯句

蕉翁の俳碑(俳くや姨のひとり)をよみ月見堂に上りける折一句をものせしに來合せし白逸宗匠脇をつけゝるより遂に此一表を聯句しぬ

なかねども肌やゝ寒し月の友

青萍 白逸

萩萩わけて硯水くむ

蟲の音もふけゆく空の名残にて

あすの旅路を思ひつるかな

霞たつ野山を駒に鞭をあて

のびあがり見る雁のゆく影  
姨捨の停車場にて白逸師がこゝなん昔の櫻清水なるとい



ひければ

山ざくら名のみをこゝに清水かな

トンネルを通り過ぎけるにあたりの山々に初紅葉のみえ  
ければ

ほんのりと酔うたすがたや初紅葉

甲府の旅舎にて

雨しとく甲斐にも富士のなき日かな

### 青葉の雫より

寅年五月關西地方に赴くとて門出しける折佐々木大人の  
道の邊の青葉わか葉などある送別の歌をよせられければ  
青葉わか葉たもとすゞしき門出かな

夜ふけて壇の浦にもものして

源平をどこのゆめやはま千鳥

### しづ枝の紅葉より

夜あけて目をさましぬればはや米原あたりにて湖水の碧  
前に横はれり

朝寒や不圖さめた目に琵琶の海

宮津の涙が磯に至りて此處は壽永のむかし白拍子花松と  
いへるが平家の何某の忘れ形見を抱きて入水せしゆかり  
にて斯くは名を得たりとの故事を聞きて今年五月屋島の  
談古嶺にて見ゆる限りは涙なりけりと詠める腰折など思  
ひあはせられて

何處見ても壽永の迹は涙かな

嵐山に遊ばんとして小督の墓のほとりを過ぎける折

竹寒しこゝに小督の苔の石

大悲閣の麓に建たるばせを塚花の山二丁上を見て脇の心を



霞にうつる京の町々

大悲閣にて人々戯に鐘をつきければ

散かゝる紅葉おとすな鐘の聲

義仲寺の近間を過ぎける折蕉翁の句など思ひ出て

この寒さ今日も粟津は木枯か

江州の永源寺に遊びて散残れる紅葉を見ける折

八景を一つまさばや此紅葉

明治三十七年四月龍動にて

大荒をのがれてこゝに桃の花

明治三十八年四月

茲にまた年一まはり桃の花

今やさく世にも名たゞる櫻花

九月の頃家信の中に

秋風やいまはたいかに驚のゆめ

ちの中にその聲高し勝雄鶏かたき

遼東の野邊のけぶりや國の花

一茶のもちぐみも一座敷あり梅の花といへる短冊を梅屋

敷主人におくるとて脇の心を

月やあらぬとうたふたそがれ



狂歌

ある年の元旦に

うらくと又明けましてお目出度うならうことなら年をとらずに

空也上人の前にとて古香爐を百花園主人に贈りける折

空也さんくふやくはぬは知らねども香のほひもわるくあるまい

甲州なる御嶽にて蕎麥を味ひしに其味いとよかりければ家づ

とにとてのこりの粉ともこひける折

舌つゞみけふうちならすみたけそばきのふ誰が見しみ雪なるらむ

天の橋立の眞景は成相山上に上らざれば其妙を知るべからず

わきて山上にて股間より倒に見るをよしとすと古き云ひな

らはしなり己れもそのごとくせし折よみて葉書にかいつけ東

京なる某氏に實況をつげける(内海の海とは橋立の左右の海水をさせる名なり)

股の間ゆ見る橋立は天の川内外の海は空にぞありける

天の橋立に物しける時文殊茶屋の三名物とて思案酒才覺田樂  
智慧餅といへるものありその思案酒にちなみて戯に

此ところよくも名づけた思案酒誰も一首と首をひねくる

また三名物を詠める狂歌

飲すぎてうつつぬかさぬ用意せよ思案酒でも酔へばつふるゝ

世の中は辛抱せねばかけまはり才覺しても金はでんがく

何事もひとりぼつちは駄目と知れとうせ世間は智慧のもち合

宮津舞鶴邊の名産女浪男浪といへるは鳥賊鯛にて造れるもの

にて風味甚だ佳なりそをよめる

由良の戸にゆくへも知らずゆる舟をいかにするめの女浪男浪か

河守の芳野屋にて家主の需によりて

ゆくりなく一夜をかりて三芳野や花も實もある心をぞ見る

ある人に  
わたちみつねすみつ月を友として心しづかに暮らしませ君



歌曲

雪

(藤間勘翁喜壽記念舞踊會の爲に)

雪は豊年の兆とかや、清女が捲きし九重の御簾のうちも偲ばれつ、  
ありさけ見れば山河草木、高樓大厦のこる隈なく、唯一白の銀世界、  
民のかまとも賑ひて、のぼる煙の絶間なく、さきはふ御國、さかゆ  
く君が代、さいさきしるき六の花、花も實もある豊秋津島ぞ、たふ  
とかりける。

御代の友垣

(長唄研精會百回記念大會の爲に)

千代八千代、さゞれ石の巖となり、苔むすまでとうたふなる、この大御代  
におほけなく、さかえさきはふ長唄の友がきつとふけふこそたのしけ  
れ。

春は空うらく、櫻狩、夏は風そよく、すゞみ舟、秋は月、冬は雪、四季折々  
のながめかな。

處かはれば品かはる、時がちがへば遊もかはる。いつもかはらぬ歌のみ  
ち。

花になくうぐひす、水にすだくかはづ、およそいきとしいけるもの、いづ  
れか歌をよまざりける、とほきむかしの國ふりも、ちかきみやびの言々  
さも、おもふ心はみなひとつ。

まことのこゑにはあめつちうごく。あめつちうごく。



なさけの風には木かやもなびく。木かやもなびく。く。  
げにあきらけき大御世に、うまれし甲斐も荒磯海の、ふかき恵の露にう  
るほひ、かしくも、  
花になり實になる見れば草も木も、なべてつとめのある世との、玉の御  
言葉かしてみて、たがひにはげみはげまされ、つくしまつらん身のつと  
め。

こまのかしら

滄浪閣なる韓國行の別宴にうたはせつる長唄

久方の、ひかりのとけき昨日けふ、門出の空もいさましや、こまのかしら  
にさきにほふ、やま櫻花はなむけに、さゝげまつらひ早ゆきて、おもふこ  
とく、なしとげて、高きほまれをいやたかめ、にしき着かさね早かへり  
ませ。

ちとせの松

同じく歸朝の宴にうたはせつる

五月雨の、はれてみそらもかゝみなす、今日のこの日を嬉しげに、大磯小  
磯はまつき、つゞく千歳の松のいろ、ちとせをかけて君がため、いはへ  
ばすゝし涼風も、袖にそよぎてそよくと、ふきくる福の福引を、おとな  
も子供もうちつれて、サア引いてたのしむさゝきげん、サツサめでたい  
祝ちやエー

千代の齡

伊藤公夫人の快氣祝にうたはせたる

ことしの春のいたづきは、あとなくいえてけふはしも、常にもまさるみ  
けしきを見まつることこそうれしけれ。軒端にそよぐ涼風に、あはせか  
なづる三つのいと、いとのかなる夕べかな。いとのかなる夕べかな。



つとひたのしむ人々の、さゝぐる酒に興そへて、千代の齡をたもちませ。  
千代の御よはひたもちませ。

明治三十七年二月十日渡英の船中、太平洋上祝賀會にて

一

日露の談判破裂して  
戦開けし折も折  
アメリカ行の伊豫丸に  
のりて乗出す我々も  
國にのこりて國の爲  
生命財産擲ちて  
あらん限りの忠節を  
勵み勵ます人々と  
同じ心の花紅葉

花も實もある勇ましき

大和錦をそのまゝに

赤き心は皆一つ

二

むかし蒙古の來襲と

同じ今度の大事件

生死浮沈の境ぞと

覺悟を極め臍固め

全國一致の實を擧げ

この年月の忍耐を

無にせぬやうに働きて

名を萬代にとゞむべし

四千餘萬の同胞よ

共に盡さむ國のため



大和錦をそのまゝに  
赤き心は皆一つ

三

思ひまはせばまはすほど  
遺恨重なる事ぞかし  
世の文明をけなげにも  
進め平和を維持するを  
天の使命と心得て  
一心不亂につとめたる  
大和人種をよそにして  
自由氣儘の振舞を  
振はゞ振へ我もまた  
一寸の蟲五分の魂  
大和錦をそのまゝに

赤き心は皆一つ

四

仁川旅順の事始め  
其吉報を得しからに  
我海上の同胞の  
其天晴の働きを  
謝すると共に爰もまた  
はるかに祝意を表すれど  
あとの如何を聞かざれば  
必ず勝利と知りながら  
どうかかうかと氣にかゝり  
船のゆく手ぞいそがるゝ  
大和錦をそのまゝに  
赤き心は皆一つ



# 附 録

度お掛出 三幅對

大磯濱邊の掛茶屋のかゝり始めより三味線一挺置くこと  
こゝに茶屋女兩人適宜の雑話中伊藤仁齋紫のふくさ包を持  
出來り茶屋の床几にかゝる

茶屋女甲 入らつしやいまし今日はよいお天氣で御座ります

ト一人茶を酌んで出す

同乙 どちらへ御出で御座り升

仁齋 今日侯爵の還曆の祝で僕は侯爵と久しい馴染デヤそれで態々  
京都から出て來たのデヤ

茶屋女甲 大さう遠方から御出で御座りました、それではあなたは侯爵を  
御存じで入らつしやいますか



仁 イヤ僕は逢つたことはないて

女甲 それでも唯今久しいおなじみヂヤと仰つしやいましたのは

仁 それはかうヂヤ侯爵は書物すきで僕の著はした書物などは久し

く見て居られるのでその書物が馴染ヂヤそれに僕は伊藤仁齋と

いうて同苗のちなみもあるのヂヤ

女甲、乙 ヘエ左様で御座りますかソレハ

トこゝへ毛谷村の六助出て來り仁齋に會釋して床几にかゝ

る

女甲 オヤ、マアお珍らしい御なり失禮ながらとちらから

六 わしは豊前から來た者で今日は侯爵の處へ行くのヂヤ

女甲 あなたアノ御方と御なじみで御座りますか

六 イ、ヤわしや知らぬ未だ御顔も見た事は御座らぬが彼の方は四

百餘州をほうつたといはれる程で強い事が御すき劍術や角力も

御ひいきヂヤわしや太閤上覽の大角力で諸大名の力士達を片ッ

ばしからほうつた剛力ヂヤ其を御覽に入れらつてもりヂヤ

女甲 ヘエそれで分りました

爰へ中村芝翫大頭の福助の羽織袴うら梅の紋付にて出來り二

人に會釋して床几にかゝる前の三人頭の大きいにびつくりし

て不思議さうに見て居る

女乙 あなたマア何人様で御座り升エ

女甲 アレマア中村芝翫さんですわ

ト福助うなづく模様よろしくありて

女乙 アノあなたが………大きな御頭りで

福 是はネわたしは幼名福助と云ひましたから其名を頭へ殘して置

くのです

女乙 あなたも今日の御祝ひにお出になるので御座り升かへ

福 堀越や寺島の親方が毎度御ひいきになりますから私も御祝ひに

上るのです



仁 僕等兩人も行くので御座る

女乙 今日御祝にお出なさるなら藝がなうてはいけませんさうです  
何ぞ御趣向がありますかへ

仁 僕には僕の得意の藝が有りますテ世間デヤ僕が三味線箱も知ら  
なかつたと笑ふから今日は一ツ隠し藝を出すつもりデヤ一ツや  
つて聞かせませうかネ

福女甲、乙 伺ひ度いもので御座りますナア

仁 ちよいと書いて置た、さらッて見ませうよエヘン  
ゆかりの色のはりなく。君は六十路の壽を。くりかへしつゝ  
めらぎの國の柱や石ずゑとならせたまへ、やといはといはに

人々 恐入ましたナア  
福 お祝だけに急調の處なんザーヒヤ／＼で御座りますネー(六助に  
向ひ)そしてあなたは  
六 おらの藝かおらの藝は力わざだ先ッ

ト是れから舞臺口調にて

遠くは須彌崑崙の黒ン坊、近くは大磯小磯の古茶みせ。爺婆子供に  
至る迄、舌を巻ての征韓沙汰。鬼上官の旗先に其人ありと知られた  
男だ、眉毛をぬらしてのせいで見る。東西球の萬國が浮繪のやうに  
見えてるは、相手がふえれば龍に水。蔚山城の櫓から、哈蘭海の果迄  
も、響き渡つた毛谷村の六助とも又ツタ貴田孫兵衛とも云ふ強の  
もの。間近くよつて面相拜み。

ト片足グット踏み出す茶屋女この響に尻もちをつく  
奉レ、エーッガモネー、(ト大きく云ふ)

女甲、乙 オ、びつくりした……夫れでは何んだが助六のせりふの様  
ですナ

六 ソリヤア其答助六をでんぐり返せア六助デヤ

女乙 あんまり、お六ヶ敷様ですネー踊りがいゝでは御座りませぬか

女甲 福さんお前さんの番デヤ何か一つ御踊りなさいましな



福 ソリヤーいけませんお前さんコソ昔取つた杵束一ツ御見せなさ  
いナ

女甲 わたしが踊りやお前さんおうたひか

福 困つたナア併しお前さんが踊るなら何かやつて見ませう

六 大分面白イッ

仁 若イ連中は陽氣だ

女甲 鳴りものはどうしませう、オーソレ〜

女乙 三味線を持出し女甲に渡す

福 福さんこゝにあります

引がたりは柄にありません關取りお前さん鳥渡鳴して下さいま  
し

六 トウ〜角力にしてしまつたナ吾輩は劍術は上手だが鳴物なん

ザー知らんテ

福 ナニわけはありませんソレ此通りですわ

女乙 ト福助調子を合せて無理に六助に教ふる振り宜敷ある

福 ソリアー鶴龜で御座んすネー

福 勿論サお祝だもの

六 コ、ニ六助いや〜乍ら三味線を手に取り

三尺の秋水を握る手に象牙の撥とは……是も一興ト云ひなが  
ら弾き試む

女甲 甘う御座んすわ

六 ナニ甘いものか駄目だ

福 ト無理につき返す模様宜しくありて

福 ソレヂヤーわたしが弾きませう只今の仁齋先生のお謠の文句が

丁度はまるやうです鳥渡拜借いたしませう

仁 よいと〜

福 ト先刻の草稿を六助に向ひ

あなたドンナでもよう御座いますから鳥渡うなつて下さいナ



六

ト草稿を六助に渡さんとする  
我輩がうたへるものか

六

御存の山かつ節でも馬子節でもよう御座り升  
朗讀でよけりや一讀んで見よう

福

ト此時草稿を受取る

福

ソレでも宜う御座りますがユカリノイロノイロノイロとかういふ  
風に尻を長うさへよんで下さりヤ一長唄といふものになつて仕  
舞ますハ

六

ソ一カそれヂヤ遣つて見よう……よいか

福

宜しう御座りますサ一姉さん始めて下さいわたくしが弾きます

女甲

お待ちなさい文句が變りヤ一節も變りますわ(一)入考りへ(思)宜し  
う御座り升

ト是より福助鶴龜の二上りの處を弾き女甲福助の扇を借りて  
踊り六助その調子にあはせてうたふ

ゆかりの色のかはりなく。君は六十路の壽をくりかへしつゝすめ  
らぎの國の柱や石すゑと。ならせ給へやとはとはに。  
ト振事有て

仁

滑稽く

人々

結構く

女乙

皆さんお揃の御模様わたしが一寸のぞいてまゐりませう  
ト出て行く

福

サア是からはお土産の趣向だ何か持つて行かにや成りますまい

六

わしはチャンと考へて置いた重箱をニツ持つて行くのヂヤ

福

それは又どういふ御趣向ですナ

六

侯爵は今年六十二ヂヤ重箱がニツヂヤから十二ヂヤラウわしが

福

六助ヂヤから六十二の御祝ひヂヤ

ワハハハコリヤア講釋付で無ければ少々分りませんナそして先  
生は



仁 僕の土産は是れヂヤ此中には謠本が一冊と後は日清戦史ヂヤ  
ト紫の服紗包を出して見せる

福 ソンナ物は先様にあまる程御座りませう  
處が今日のお土産は是に限るのヂヤ

福 夫は又どういふ譯で

仁 サア此謠本は觀世流の小謠集ぢやそこで戦史は歴史ヂヤ觀世と  
歴史ヂヤからくわんれきヂヤ今日の還曆の御祝ひヂヤ

福 ナアル程學者は學者のおしやれで御座り升ナア

六 さうしてお前はどういふ趣向だネ

女乙 皆さんもうお揃の御様子お急ぎなさいませ

福 ト女乙還り来る皆々うなづく

仁 わたしのは前から趣向も何もないので當意即妙でやります

福 當意即妙でどんなことをするネ

福 先づあなた方御二人をお土産にするのですナ

六 わしら二人を

仁 みやげにするとは

福 當てとてらんなさい

六 ム、分つたおぬしが福助で先生が儒者ダ其處で吾輩が六助だか

五人 らそら三人揃つて福祿壽だこれが今日の  
お目度掛三幅對で御座り升

と揃うて禮する。

(幕)

うきくさのあと終



大正十年十月一日印刷  
大正十年十月五日發行

非賣品

編發  
纂行者

東京市芝區西久保城山町四番地  
末松生子

印刷者

東京市芝區三田四國町二番地  
大瀧由次郎

印刷所

東京市京橋區宗十郎町十五番地  
東京國文社



11  
495



無極  
（印）



終

